様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２８２３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２１２７

研究課題名（和文）ロジックモデルを用いた高齢者施設のケア文化の指標の開発

研究課題名（英文）Development of a Logic Model to Indicate Quality of Care Culture in Facilities for the Elderly

研究代表者
内田　達二（Uchida, Tatsuji）

東京医療学院大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：００７１５１７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：組織文化は，ケアの質に影響を与えるとされる。文化とは，人間の存在に意味を与え，個人の利益を超越する「重要な価値」である。本研究では，組織文化の醸成の過程を検討した。そして，以下の成果を得た。1）組織文化醸成の過程とその中で重要な取り組みをケア専門家のインタビュー調査から明らかにした。2）ケア専門家により明らかにされた組織文化醸成の要素をアンケート調査し，その分析結果から「施設の取り組み・仕組みづくり」6因子，それによる「職員の変化」4因子，「利用者・家族・組織の変化」4因子を抽出し，ロジックモデルで構造化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
高齢者施設サービスの質の向上に向けた取り組みは重要であり，現行制度では人的，物理的環境等のサービス提供上の基準を設けているが，今回作成した指標によりサービスの質向上のための取り組みについて確認することが可能となる。組織としてサービスの質向上に向けてできていること，今後取組むべき課題について確認し対応していくことで，質の改善につながることが期待される。利用者・家族の要望がサービス提供に反映されるような取り組みが重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The organizational culture of care is being increasingly recognized as having an influential impact on the quality of provided care. Culture is a collective "key value" that gives meaning to human existence and transcends individual interests. In the present study, we examined the process of fostering organizational culture. The following results were obtained: 1) The process of fostering organizational culture and the important initiatives in the process were clarified through interviews with care professionals; 2) Based on the questionnaire survey, the factors for fostering organizational culture, which was identified by care professionals, were structured in a logic model. A total of six factors for “facility initiatives and mechanism development,” four factors for “staff changes” due to these initiatives and mechanisms, and four factors for “changes in users, families, and organizations were identified.

研究分野：老年期リハビリテーション

キーワード：高齢者施設　ケアの質　ケア文化　ロジックモデル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)超高齢社会を迎えた日本において施設ケアは重要な課題であるが，施設における高齢者虐待の相談件数は，年々増加している(厚生労働省, 2021)。現行制度下では，高齢者施設はサービス事業者としての指定基準，すなわち，設備面や人員，サービスの提供に関する審査があるのみであり，厳密にはケアの質を査定するものではない。
(2)ケアの質を改善するために組織で改革に取り組む組織文化の重要性が指摘されている(Norlan, 2004, Killet, 2016)。文化とは，人間の存在に意味を与え，個人の利害を超えた，集合的な「重要な価値」である(Kitwood, 1997)。公共サービスの質の向上のためにロジックモデルを構築することが有用(Santana, 2018, Gupta, 2017)とされるが，高齢者施設のよりよいサービスの質を生み出す組織文化に関するモデルは，まだ十分に検討されていない。

２．研究の目的

本研究では，よりよいケアを創り出す組織文化をケア文化として，ロジックモデルによる高齢者施設のケア文化の指標を開発することを目標とした。
そのために以下の点を検討する。

(1) 高齢者施設の職員を対象に，インタビュー，フォーカスグループインタビュー調査を行い，「高齢者施設のケア文化の指標」合意形成を行う。
(2) 高齢者施設の管理者，主任，ケアワーカーを対象としたアンケート調査により「高齢者施設のケア文化の指標」のロジックモデルの信頼性と妥当性について検討する。

３．研究の方法

(1)ケア文化醸成の取り組みを把握するために，施設で職員の指導を行っている専門職(介護福祉士，社会福祉士，介護支援専門員，看護師)を対象としたインタビュー調査を実施した。
(2)(1)で取り上げられた項目を検討する目的で，ケア専門家でフォーカスグループインタビューを実施した。ケア専門家は，認知症介護指導者研修等の研修を受講し，施設で職員の指導を行っている責任者とした。
(3) (2)で策定した指標の信頼性と妥当性の検証のための郵送アンケート調査を全国の高齢者施設(老人福祉施設，老人保健施設，地域密着型老人福祉施設，認知症対応型グループホーム)1000事業所を無作為抽出法にて選定して実施した。

４．研究成果

(1) 高齢者施設の責任者に半構造化面接を実施した。インタビュー結果をテキスト化して内容分析を実施した(表 1)。組織文化を醸成していく上で大切なのは，利用者，家族が満足と感じるようなサービスを提供するための施設理念であり，それを実践できるような研修体系と実践(On the Job トレーニング)を継続していくことが重要とされた。それらは職員の異動によっても容易に変化するので，職場でその内容を引き継ぐといった文化を醸成していく具体的な過程を明らかにした。

表 1 組織文化を醸造のための取り組みに関するインタビュー調査

カテゴリー	内容
インプット	
規範や理念	・利用者の立場にたつ　・生活に根差した本人の意欲を大切にする　など
業務体制の整備	・休みがきちんととれる　・労働力の確保　・相補的に支え合う　など
職場内・地域との連携	・委員会などの組織つくり　・地域連携の受入れ　など
活動	
人材教育・育成	・研修会への参加と伝達　・On the Job トレーニング　・事例検討　　など
標準的ケア実践	・オムツ外し　・拘束ゼロ　・パーソン・センタード・ケア(本人の声をきく，個別ケア計画)　など
委員会・地域連携活動	・委員会の運営・参加　・地域活動への参画　・面と向かって話す　など
アウトカム	
利用者の方の変化	・笑顔(1日1回は笑ってもらう)　・いい風に変わってくれると嬉しい　など

スタッフの経験	・失敗をしたら，それを乗り越える　・学習したことを体験で裏付ける　・腑に落ちないと身につかない　など
周囲との関係	・気軽に相談する　・地域の他施設との交流，頼りにされる　など
スタッフの意識・行動の変化	・ゆっくりと利用者さんと向き合う　・関わらない業務は効率よく行う　・支え合う仲間関係　など

- これらの過程にはリーダ(管理者・上長)の役割が重要であり，時間がかかり，継続されなければならない

(2) インタビュー結果からロジックモデルを作成した(図 1)。この中で，Activity-output の結果が short-term Outcome のため，重複を避け short-term Outcome の項目を指標の項目とすることにした。そのようにしてケア文化を醸成するための取り組み 119 項目を策定できた。策定した項目について，ケア専門家によるフォーカスグループインタビューを実施し，項目の妥当性について検討した。最終的には 30 項目が除外され 89 項目がケア文化の指標として抽出された。

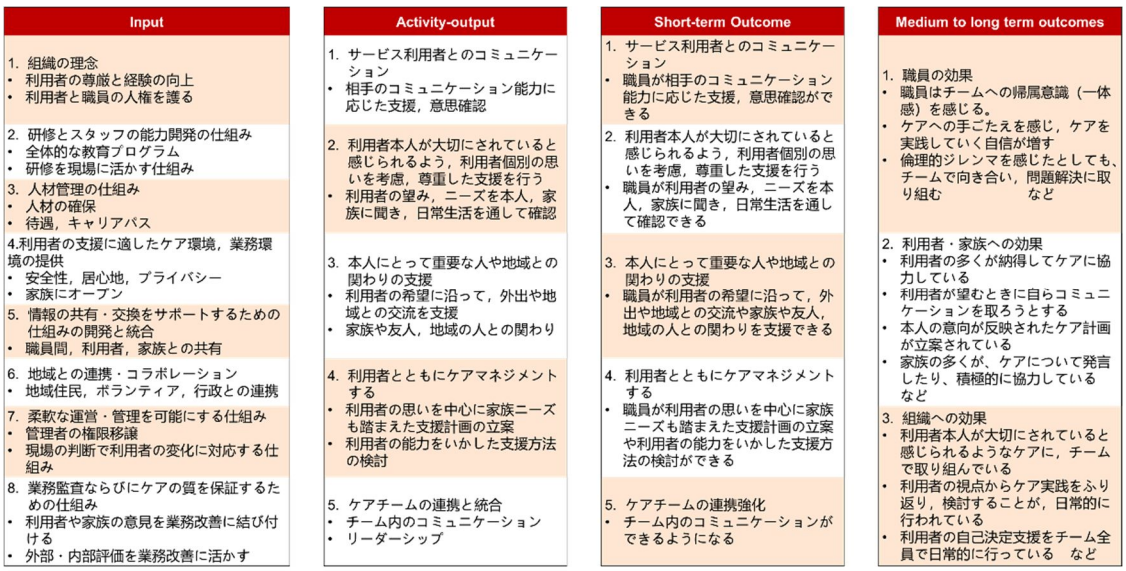

図 1 ケア文化を醸成するための取り組みの大項目と中項目

(3) (2)で作成した指標を用いて，全国の高齢者施設(老人福祉施設，老人保健施設，地域密着型老人福祉施設，認知症対応型グループホーム)1000 事業所に郵送のアンケート調査を実施した。

調査の結果，141 施設，344 名より回答を得た。質問項目の平均は 3.6(5 件法)であった。ロジックモデルの段階別に因子分析を実施した結果，インプット項目としては，【支援に適したケア環境】，【ケアの質の保障】など 6 因子，初期アウトカムは，【その人の思いをきいて実現するケア】，【利用者，家族とともに行うケアマネジメント】など 4 因子，中・長期アウトカムは，【チームで行うケアの視点の変化】，【利用者自身の生活の変化】など 4 因子が抽出された(図 2)。このモデルは，専門家グループで策定した当初のモデルと概ね合致しており，Cronbach の係数も比較的良好であった。今後，本指標の有用性を検証していくためにケア場面の観察研究を行うことが課題である。

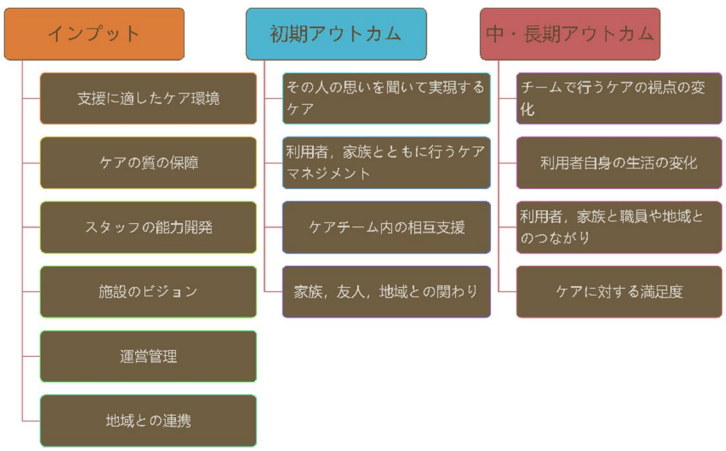

図 2 高齢者施設のよりよいケア文化のロジックモデル(因子分析：主因子法プロマックス回転)

【引用文献】

Gupta, R., Moriates, C., Harrison, J. D., Valencia, V., Ong, M., Clarke, R., ... & Wachter, R. (2017). Development of a high-value care culture survey: a modified Delphi process and psychometric evaluation. BMJ quality & safety, 26(6), 475-483.

Killett, A., Burns, D., Kelly, F., Brooker, D., Bowes, A., La Fontaine, J., ... O'Neill, M. (2016). Digging deep: How organisational culture affects care home residents' experiences. Ageing and Society, 36(01), 160-188

Kitwood,T.(1997). Dementia reconsidered: The person comes first. Open university press.

厚生労働省(2021).令和 3 年度「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果」,https://www.mhlw.go.jp/content/12304250/001029242.pdf, (2023.6.5閲覧)

Nolan, M. R., Davies, S., Brown, J., Keady, J., & Nolan, J. (2004). Beyond ‘person‐centred’care: a new vision for gerontological nursing. Journal of clinical nursing, 13, 45-53.

Santana, M. J., Manalili, K., Jolley, R. J., Zelinsky, S., Quan, H., & Lu, M. (2018). How to practice person‐centred care: A conceptual framework. Health Expectations, 21(2), 429-440.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 内田達二，村田康子	４．巻 48
２．論文標題 パーソン・センタード・ケア	５．発行年 2020年
３．雑誌名 総合リハビリテーション	６．最初と最後の頁 925-932
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1552202050	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田 達二	４．巻 26
２．論文標題 重度認知症高齢者のケアとリハビリテーション　活動能力の評価と活動支援	５．発行年 2019年
３．雑誌名 臨床 老年看護	６．最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Tatsuji Uchida, Yasuko Murata, Yusuke Yamaguchi, Yuko Nakamura
２．発表標題 A Logic Model to Evaluate Nursing Home Care Services and a Culture of Excellence
３．学会等名 15th International Congress of the Asian Society Against Dementia（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 内田達二，中村裕子，山口友佑，村田康子
２．発表標題 高齢者施設職員のケア文化の創造と醸成に対する取り組み
３．学会等名 日本認知症ケア学会 第22回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 内田達二
２．発表標題 ロジックモデルを用いた高齢者施設のケア文化に関する研究：インタビュー調査の質的分析を用いて
３．学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会　第22回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 宮口英樹（監修），小川真寛（編集），西田征治（編集），内田達二（編集）	４．発行年 2019年
２．出版社 メジカルビュー社	５．総ページ数 331
３．書名 認知症をもつ人への作業療法アプローチ-視点・プロセス．理論 改訂第2版	

１．著者名 内田達二，村田康子，山口友佑，中村裕子著，目黒謙一 編著	４．発行年 2022年
２．出版社 東北大学出版会	５．総ページ数 391
３．書名 A logic model to evaluate long-term care services and a culture of excellence in Fusion of the West and the East, Harmony of Human and Technology	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中村　裕子 (Nakamura Yuko) (10790371)	社会福祉法人仁至会認知症介護研究・研修大府センター（研究部、研修部）・研修部・研修指導主幹 (93904)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山口　友佑 (Yamaguchi Yusuke) (70809540)	社会福祉法人仁至会認知症介護研究・研修大府センター（研究部、研修部）・研修部・研修指導員 (93904)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関